

2026年3月15日大齋節第4主日説教

サムエル記上16章1-13節

エフェソの信徒への手紙5章8-14節

ヨハネによる福音書9章1-41節

本日の福音書は、エルサレムにあるシロアムの池の奇跡物語として有名なお話です。一つのお話としては、非常に長いお話です。以前の聖書日課では中間部分を省略してもよいことになっていましたが、新しい聖書日課では、1節から41節まで、全体を通して読むこととなっています。

復活前主日は、福音書として長い受難物語を読むこととなっていますが、そこらはいくつかの場面に分かれています。本日の箇所も、イエス様と生まれつき目が不自由な人との間に起こった出来事ととしては、一つのお話ですが、大きく三つに分けられます。イエス様による生まれて付き目が不自由な人の癒し(9:1-12)、ファリサイ派の人々のその人への尋問(9:12-34)、その人の信仰告白とファリサイ派の人々の罪の露呈(9:25-41)です。ただし、三つの部分それぞれ長さが異なりますし、またその一つの中でもお話は分かれ、展開します。全体を通してゆっくり解説というわけにはいきませんので、大切なところだけに注目して学びたいと思います。

物語は、イエス様が「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた」(9:1)ことから始まります。そして、弟子たちが、「先生、この人が生まれつき目の見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」(9:2)と質問したことから展開します。弟子たちがそのように質問したのは、その当時(今もあります)、**「出エジプト記」**の20章5から6節**「私は主、あなたの神、妬む神である。私を憎む者には、父の罪を子に、さらに、三代、四代までも問うが、私を愛し、その戒めを守る者には、幾千代にわたって慈しみを示す」**を根拠に、理由のわからない不幸に対する説明として、因果応報の考えが用いられていたからです。目が不自由な人を見かけて、何かをしようとするのではなく、その存在について罪と関連させた説明を求める弟子たちの姿が、まさにそのことを示しています。

イエス様は、そのような弟子たちに**「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」**と答えます。そして、イエス様は、**「私は、世にいる間、世の光である」**(9:3)と語り、不思議な所作でその人の目を癒すのですが、この行為がすべての始まりとなります。そして、この場面にこの後のお話をどう考えるかの鍵があります。それはイエス様の言葉の中にあり、**「神の業がこの人に現れるため」**と**「私は、世にいる間、世の光」**との二つです。ただし、この二つをどのように関連させて考えるかは、解釈者によって異なります。結論から言えば、この箇所に関しては、別々に考えてはいけません。しかし、ヨハネ福音書全体の主題と考えますと、イエス様が**「世の光」**であることは中心的テーマといえます。また、本日のお話は不自由な目の癒しの奇跡物語ですから、**「世の光」**という不思議な言葉よりも、**「神の業がこの人に現れるため」**にのみ注目したくなります。しかし、ヨハネ福音書は、この長いお話を通して、その両方から信

仰を考えるように促しているのです。

生まれつき目が不自由な人は、イエス様によって癒されることになりました。本当ならば、その後、自由な人間として生きることが出来るはずですが、社会はそうはさせませんでした。周囲の人は、その人が誰であるかも認識できないのです。また、その人がイエス様の名前を挙げて、その居場所がわからないので、出来事を理解できないのでした（9：8-12）。

周囲の人々は、出来事の説明をファリサイ派の人たちに求めます。その人は、イエス様によって自分に起きたことを具体的に説明します。しかし、ファリサイ派の人々は、安息日を守るか守らないかという基準から、何が起きたのかを判断できません。そればかりか「それでも、ユダヤ人たちはこの人について、目が見えなかったのに見えるようになったということ信じなかった」（9：18）と目が見えるようになったという事実を認めないのです（9：13-17）。ここから人々、ファリサイ派の人々、そしてユダヤ人と、生まれつき目が不自由であった人に相対する人々の名称が変わります。

ユダヤ人たちは、その人の両親を呼び出します。おそらく、生まれつき目が不自由であったのは、本当かどうかの確認でしょう。しかし、両親は、生まれつき目が不自由であったことは認めますが、何が起きたのかについては触れません。直接は書いてありませんが、両親は社会から自分たちが追い出されることを恐れ、子どもであるその人を見捨ててしまうのです。そのあと、ユダヤ人とその人との論争が続く、二番目の区分は長いのですが、最終的に彼は「彼ら（ユダヤ人）は、『お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか』と言い返し、彼を外に追い出した」となります。その人は、彼に奇跡は起きたのですが、社会が全く変わっていないために、彼は社会から追放されるのです（9：18-34）。

そのような人に、「イエスは彼が外に追い出されたとお聞きになった。彼と出会うと、『あなたは人の子を信じるか』と言われた」とイエス様の方から彼に会いに来ます。それが三つ目の部分です。そして、信仰を求め、彼は「主よ、信じます」と信仰を告白するのです。このお話は、この時この人に本当の救いが起こった。そのように語っていると思います（9：35-41）。

「世の光」であるイエス様について語る言葉も、「神の業」という出来事の裏付けがなければ空しい言葉です。人間に過ぎないわたしたちは奇跡を起こせませんが、それを感じさせる環境をつくる努力はできます。そのような環境は今日的に言えば、バリアフリーの環境といえるでしょう。しかし、「世の光」であるイエス様を通した信仰なしに、ただ環境が整っても、生まれつき目が不自由な人が社会から疎外されたようなことが起こります。人間が造る光は、まことの光ではなく、影を生んでしまうからです。そこにまことの救いはありません。そして、人間はどのように努力しても、死というバリアを超えられません。

本日のお話は、信仰に基づいて、この世界にバリアフリーの環境を作ることを求めます。ただし、それは一般社会のものとは異なります。信仰を通して、社会に存在する様々なバリアのほかに、誰でも必ず迎える死というバリアを超えて、この世界にいながら、信仰の世界に、共に生きることが大切だからです。世界がどのようであっても、あなたは、信仰の世界に生きている。だから何も心配はない。そう宣言できる信仰、教会でありたいと思います。